

平成20年度決算の概要について

平成21年6月17日
(社)第二地方銀行協会

会員行の平成20年度決算(単体)の概要は以下のとおり。

(注) 計数は平成21年3月末時点の会員行44行ベース。

1. 損益概況(業務純益:28億円、経常利益:△4,510億円、当期純利益:△3,755億円)

平成20年度決算の業務純益は、国債等債券関係損益の悪化(投信、外国証券等の減損処理)に加え、資金利益および役務取引等利益の減少、一般貸倒引当金繰入の増加から減益(前年度比△99.2%減)となった。

経常利益は、業務純益が僅かの利益計上に止まるなか、株式等関係損益の悪化や与信費用の増加から赤字に転じ、これを受けて、当期純利益も赤字となった(経常利益、当期純利益の赤字は平成14年度決算以来のこと)。

2. 業務純益の状況

(1) 資金利益(9,987億円、前年度比△470億円、△4.5%)

資金利益は、前年度比△4.5%減少し9,987億円となった。

この内訳をみると、預貸金収支は、貸出金残高(平残)は増加したものの、預貸金粗利鞘が縮小したことから、同△1.7%減少して8,262億円となった。

また、有価証券利息配当金は、利息収入および投信の収益分配金の減少から同△12.5%減少して1,773億円となった。

(2) 役務取引等利益(686億円、前年度比△246億円、△26.4%)

役務取引等利益は、保険窓販手数料は小幅増加となったものの、投信窓販手数料が減少したこと等を主因に前年度比△26.4%の減益となった。

(3) その他業務利益(△2,741億円の赤字、前年度比△2,489億円の悪化)

その他業務利益は、保有投信および外国証券にかかる減損処理の増加から国債等債券関係損益が悪化したことを主因に△2,741億円の赤字(前年度は△252億円の赤字)となった。

(4) 経費(7,553億円、前年度比+15億円、+0.2%)

経費は、人件費、物件費ともに前年度並みに止まった。

3. 不良債権処理の状況

不良債権処理額は、貸出先企業の業況悪化のもとで貸倒引当金繰入および貸出金償却が増加したことから、前年度に比べほぼ倍増となった。

また、金融再生法開示債権（破産更生等債権、危険債権、要管理債権）は、企業の業況悪化から、破産更生等債権が増加した一方、要管理債権は、破産更生等債権にシフトしたことや貸出条件緩和債権の基準の見直しを主因に減少したため、前年度末に比べ若干の増加（前年度末比+0.4%）に止まった。一方、開示債権比率は、総与信の増加から同△0.04%ポイント低下して4.30%となった。

4. 経常利益および当期純利益の状況

経常利益は、業務純利益が大きく減少するなか、臨時損益が大幅損超となったことから、△4,510億円の赤字となった。なお、臨時損益は、個別貸倒引当金繰入や貸出金償却の増加、保有株式の減損処理等の増加に伴う株式等関係損益の悪化から、△4,536億円の損超となった。

この結果、当期純利益は、△3,755億円の赤字となった。

5. 単体自己資本比率（9.60%）

単体自己資本比率は、利益剰余金の減少により自己資本額が減少した一方、保有有価証券の減損処理の増加等からリスク・アセットが大幅に減少したため、前年度末比+0.24%ポイント上昇して9.60%、また、Tier I比率は、同+0.01%ポイント上昇して7.20%となった。

6. 預金および貸出金（末残）

(1) 預金（56兆995億円）

預金（末残）は、前年度末比+5,375億円、+1.0%増加して56兆995億円となった。預金者別にみると、一般法人預金が減少した一方、個人預金は増加した。また、種類別にみると、要求払預金、定期性預金ともに増加した。この間、外貨預金は為替円高を背景に高い伸びを維持した。

(2) 貸出金（43兆5,832億円）

貸出金（末残）は、前年度末比+6,522億円、+1.5%増加して43兆5,832億円となった。

以上